愛犬と登る猪猟の頂点 ①

田宮 治

猪猟の流れ

始めた頃は誰でも、ただその流れに乗って、のんびり、ゆっくり「猪獲りの夢」を追いかけているようである。

夢も希望も、のんびりと追っているうちはなかなかよいもので、どんどん膨らみ、なんでもできると気持ちだけが限りなく先走りするものだが、長い年月は必ずそんな気持ちにブレーキをかけてくれる。誰が教えることもないのに、自ら「夢」と「現実」のギャップに気づいた時である。

人は誰でも夢から始まり、その実現に努力し続けるなかで、予想もしない難題に突き当たる。いくつもの困難を苦労して乗り越えられれば、夢を現実のものとして摑み取れるのである。

何事においても、流れに上手に乗り切った者が勝者であり、失敗し挫折、諦めた者が敗者である。そんな当然のことでも、多くの敗者は失敗の原因さえ摑めないのが現実のようで、なんとも口惜しい限りである。

せっかく、苦心して流れに乗って頑張ってきたのだから、失敗でも繰り返しやって、「前途を遮るものは何か」を得心ゆくまで検証することで、なんとしても思い立った夢は必ず現実のものとして摑み取り、楽しんでもらいたいものである。

おしなべて、物事をなす上で大切なのが「流れ」である。大きな「本流」から「支流」に至るまで確実に見極めるのが肝心で、その時々の流れにどのように対処するかが重要なことである。

具体的にいってしまえば、筋書きのない猪猟にどんな「本流」があって、「支流」をなしているか。その検証や対処まで含め、流れに乗り、流されているのではなく、流れは自分で作ってそれに乗れと言いおきたいのである。

たとえば、猪猟という一般概念は、グループ猟でも単独猟でも全く同じように受け取られるが、やっている猟法、つまり「流れ」は大きく異なり、とても同じ目線や考えで論じることはできない。

そこで、目指す単独猪猟で、止め犬群を使った場合を掘り下げてみたい。あくまでも自分でやってきた独断の猪猟感である。

止め犬群での猪猟

「なんで今さらそんなこと」との感じもするが、現在の関東猪犬猟山彦会千葉支部（以下、山彦会千葉支部）では、止め犬群を使っての猪猟で頂点を極めようと一生懸命である。

初猟以来、荒猪獲りという目標を押し出し、気持ちを盛り上げているが、なかなか思うようにいかなかった。それでも一年くらいで必ず頂点に立たせたいとの信念で、無我夢中で突っ張ってきた。

毎日のように「どうしたら分かってもらえるか」と、登り詰めて行くなかで頃合いを見計らいながら、あの手この手と自分にできる最高の技を繰り出し、それを見ていただくことで理解し実力にしてほしいと考えて頑張ってきた。

「最高の技」などといってみても、元々は犬たちとともに猪を追い、這いずり回って覚えた全くの我流であるが、俺が作った犬たちも含め「これが一番よい」と思っている俺流の押しつけである。

それにもかかわらず、誰一人文句も言わずよくついてきてくれた。猪猟で頂点を極めるのは思いのほか大変なことで、何十年もアッという間に過ぎるものである。それもやってみて初めて分かる苦難ばかりである。

それをわずか一年くらいでやろうと思っているのだから、土台から無理がある。その無理を押し通そうというのだから、勢い自分がやってきて知り尽くしている止め犬猟を信念を持って押し進める以外ないのである。

比較的簡単な追い犬を使ってのグループ猟ならば、猪山を大勢で取り囲み、追い犬で作る猪猟の流れをタッはジーッと待ち、上手に猪を撃ち獲ればよいのである。

しかし、止め犬を使っての猪猟では、止めるのも寄りつくのも、すべてが猪猟の流れに逆らうものばかりである。犬に追われた猪を、その流れを静かに待つことで撃ち獲る猪猟と比べて、止め犬猟の目指すものは強引に猪を追い出すことから始まって、止めるのも寄りつくのも、そして止めの撃ち方に至るまでも、すべてが細心の注意を払っての「攻め込みの猟法」なのである。単独猟や二、三人での猪猟は、止め犬で猪をキチッと止めさせないことには勝負にならないという考えである。

大物は静かに、思い切り寄って撃つことである。犬たちの鳴き声をよく聞けば、すぐ判断できるようになるものだ（犬は富士美号）

押しなべて止め犬群で目指す猪猟では、猪猟の流れはすべてを自ら作るのであって、流れをうまく引き寄せ、上手に撃ち獲るということなのである。

どんな場面でも強い気持ちで攻めきることが重要である。猪を恐れず、決して逃げずに常に犬群の先頭に立って戦い続けていれば、必ず犬群にも主人の気合が乗り移って、思いどおりの名犬群になるものである。

止め犬猟をどんな形で掘り下げようと、立派な理論で決定づけてみたところで、行き着くところは名犬群である。

当然のことであるが、猪猟の要は名犬群ということになる。誰がなんと言おうと、名犬群作りを怠っていたのでは、いかなる達人がどんなに頑張ったところで小猪一頭獲れるものではない。

自信を持って存念を堂々と主張したり、思いどおりの猪猟を見事に実行できるのは、そばに名犬群がいるからである。

この辺のことは、達人ならば分かりきっていることだと思うのだが、問題なのは達人の考え方や、実践能力などは達人になっていなければ決して分からないことである。そんな意味からも、猪猟を志したからには必ず達人になることであり、猪犬に生まれた犬であれば訓練し、実戦で磨き抜いて必ず名犬にすることである。

そんな当たり前のことにも気づくのに何十年もかかったが、やっとこの年になって「猪猟道に行き止まりはない」と思うようになった。やっても登っても、まだまだで、分からない難問をどうしたら乗り越えられるか。

また安全で有利で、しかも一番

私にとってこだわりは犬舎で、日当たりと風通し、そして夏は涼しい緑の中である

キヨ号、ヨシ号、ハヤト号（戦死）、愛が名犬にする

猪猟の基本は犬であり、作るのも、育てるのも、訓練も生半可なものではない。良い母犬は10頭の子供でも上手に育てる

簡単で良いと思っている猪猟の近道に乗せてやりたい一心で、猪の止め撃ちでも寝屋止め猪の撃ち方や、絡み止めの撃ち方などの危険を伴うものは実戦によって繰り返し体験していただいた。

そうすることで、言っても分かりづらい難題は「このようにしてやるのだよ」と自分のできる最高の戦いぶりをありのままに見てもらい、体験を通して覚えてもらってきた。

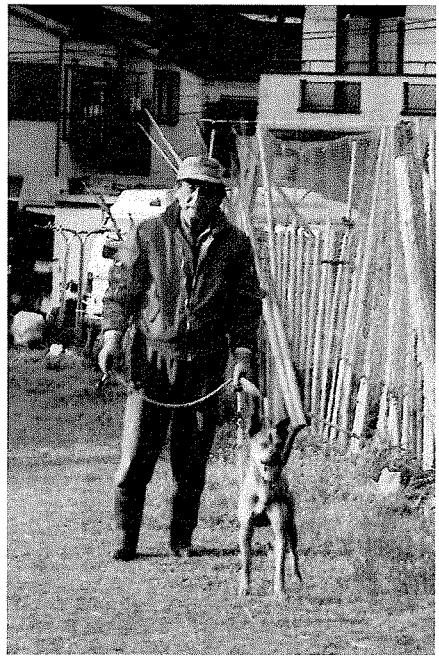
その甲斐あって、山彦会千葉支部の猪猟は急成長を遂げ、わずか二カ月くらいで難題の止め撃ちなども堂々とできるようになり、安心して見ていられるようになった。

私はこの時機に、ともすれば忘れ勝ちな止め犬群に対する考え方と、これに対する感謝の気持ちを教えてやりたいと思っている。

使う犬たちさえキチッと作れる猪猟人になれたら、犬たちは思いどおりのどんなチャンスでも作ってくれる。

どんな激戦でも必ず勝つ究極の作戦や、絶対の自信を持って思い

大分の戸川氏の愛犬たち。千代号の牝犬（台牝）を含む私の犬舎の犬たちが中核を担っている。犬たちは猪の頭を咬み通すほどの強い咬みが身上である



猪犬の基本訓練の綱引き。雨の日も風の日も、決めた時間を必ず引き、一緒に遊ぶのがポイント

千代号の子供たち。茶の母から３：３（黒）が生まれるが、バラツキはない。良い咬み芸をみせる

どおりの猪猟がいつでもできるのは、そばに一流芸の犬群がついているからである。

そんな当たり前のことを繰り返し特記しているのは、止め犬猟であるから、いつでも猪をキチッと止められる猟がやりたいからである。

さて、そこで思い出してほしいのは、どんな山でも主人の思ったとおりに猪を見つけ出し、「キチッと止め置く犬たちとは、どんな犬たちだろうか。また、キチッと止めるとは、どんな止め方なのだろうか。そして止めた猪を、どのように撃ち獲るのだろうか」という素朴な疑問である。

簡単そうだが、これはまさに難問で、どの項目一つ取り上げてみてもキチッと答えを出せるまでには、気の遠くなる長い年月と想像を遙かに超えた努力が必要である。

登り詰めて頂点に立つなどと目標をぶち上げてみたところで、猪猟の基本である、こんな当たり前の項目が確実に実行できなければ、頂点や達人にはとてもたどり

着けないのであり、夢の名犬だって、究極の猪猟なども決してできないのである。

私はそれでも必ず山彦会千葉支部を頂点に立たせたいと思っているが、この夢の実現は一流犬群の働きと、何が何でも頂点に立つという全員の団結、そして不屈の根性がどうしても必要である。

さて、これからの急場を登り詰めて行くなかで、踏み台になったりハシゴになる重要な犬芸や精神力は、その時々に合わせすべてを実戦で見せ、体験を通して上手にできるようになるまで何度でも繰り返してやり抜くのが大切なことである。

いよいよ差しかかった猪猟道の急坂をどうよじ登り、しのぎ切るか、今まさに山彦会千葉支部に突きつけられた現実である。

私はこの正念場を絶好機と受け止め、わが犬舎の自慢の犬群でなければ絶対にできないと自負する秘策を練って、この急場の踏み台にしようと思っている。

これまでの辛すぎる困難な猪猟道も、このようにして登れば簡単で楽しいぞと言い切れる、最高の近道を構築することである。

できることならば考え方までも進化させて、「楽しくなければ猪猟ではない」というところまで気持ちを高めていきたい。そして、好きな猪猟ができるだけで幸せなのだよと、心から思う「感謝の気持ち」を育てたいものである。

「天王山」越え

かつて豊臣秀吉がこの天王山を戦い取ったことによって、勝負の行方を決定づけ、明智光秀軍との戦いに勝利したという史実の名山である。

物事には必ずこのような勝負を決定づける大きな分かれ道がある。やっとめぐりきた勝負を決する絶好の機会に、その場をどのように攻め切って登り、頂点に立つかを考えるのは、何事をやり遂げるにも最も重要なことである。猪猟を思いつくままに、この豊臣秀吉の天下取りの手段に重ね、史実を振り返ってみれば一番よく分かるような気がしてのことだ。

まず、秀吉は同志であった知将、光秀を知り尽くしているので、すぐ大軍になると予感。間髪を入れず攻撃することで、見事主人信長の仇を討ったのである。

この作戦一つをみても分かるように、戦う相手を知ることが一番で、次に攻め時である。そして第三は最も大切な「戦う場所」、つまり「天王山」を見ただけで攻め方までも即決できる決断力と、地形を見る目である。

秀吉の秀でた才能と戦い抜いた戦術の流れを見ると、そのすべてが自己流で、世間をアッと言わせる奇策ばかりである。世にいう一夜城や水攻めは当時の常識をはるかに超えた奇策で、秀吉が苦労して編み出した、秀吉ならではの戦術である。

秀吉はここぞと思う一戦では必ず場所を見て、一番使える良い手を素早く打つことで勝つ実績を重ねた。それは誰も思いつかない奇策ではあったが、戦士には勝つ喜びを知らしめ、勝ちを重ねることで自らの自信とし、ついに主人信長にも信頼されて、信長軍を二分して持つ勢力に登り詰めたのである。

そして、この戦いに勝ったことで、二分していた勢力までも一つの本流にまとめ、大義を掲げ天下統一の階段を駆け登るのである。

私は前述のように猪猟で登り詰め、さて、これからが頂点だという絶好機の戦いは、この天下取りを懸けた大一番となんの変わりもないものだと思っている。

いや、それどころか、天下分け目の大戦なればこそ、武将秀吉も英知を結集し戦ったのであり、その作戦や戦いぶりを見れば一目瞭然で、全く猪猟を極める戦いの良いお手本のように思うのである。

下手な猪猟談議を押し進めるよりは、この戦いの大切な注意点である。

まず、この戦いの敗者光秀は元々武家の出で、英知で信長の信頼を得た知将である。信長に仕える身でありながら、主人の言動に

全猟誌の保存整理に！
ローリング・ファイル
●二冊一組●送料税共1260円
●お申込みは全猟へ

耐え切れないことであっても、一時の腹立ちまぎれや思い付きで、主人から借りた大切な兵を主人に向けた戦いであっては武士道に背くもので、本筋から大きく外れたものである。本筋から外れた者は、裏切り者として排除されるのも当然である。

猪猟の親方でもよくあることで、人から借りた大切な兵、つまり犬たちをただ便利に使うだけで犬捜しもしない達人？がいるが、このような輩は短期戦には勝てたとしても、決して長続きはしない。犬たちに感謝の気持ちのないグループにはどんな良い待遇を受けようが、だんだん行くのも嫌になるものである。

その道を登り極めようとの立派な考えを持っていても、同志までも敵に回すような手段を使ったのでは、先の結果は明らかである。その辺のことを証明するのが、世にいう光秀の三日天下である。

一方、秀吉は農民出身で、武士になり切るのも大変であった。信長の信を得ようと草履取りから始まって、「サル」と呼ばれようとよく耐え抜き、一角の武将を目指したのである。地を這うような苦労が実り、秀でた武将を配下におさめ、良い妻にも恵まれる。

当然、そうなれば信長の目に留まらぬわけがない。どんどん出世して行くなかで苦労して編み出す戦術は、素人故にすべてが型破りの奇策であった。

私が最も感銘しているのは、この型破りの奇策の数々である。秀吉の勝因は誰も気づかない奇策を使っての一歩先を行く新しい戦術であり、刀や槍を大量の鉄砲を使って進化させることで全国の支流を引き寄せ大きな本流を作り、圧倒的勢力に登り詰めて行ったのである。

何事でも同じであるが、初めは何も知らなくて当たり前で、それで良いのである。目的意識をキチッと持ってそれに向かって日夜努力し、考えをめぐらし苦難を乗り越え続けていれば、そのなかで必ず自分なりの目的達成の大切な奇策が生まれるものである。

当然のことで、自分がやってみて体験のなかから考えついた策であるから、我流ではあっても、そのすべては目的達成に欠かせないものとなるのである。体験を重ね、積み上げた経験から得た知識は何にも勝る宝物である。

猪猟を極めるのも、猪犬群を完成させるのも、言い切ってしまえば好きでやっている自分との戦いなのである。

そして、創意工夫して自分が作った犬群であったり、奇策であれば、その長所や欠点もよく分かっているので、激戦やここぞの一戦で使うのが一番安全で有利な良い作戦なのである。

やっとのこと分かれ道に差しかかった山彦会千葉支部には、この辺のことをよくよく認識していただき、頂点までの勇気にしたい。

そして、毎日のようにかかってくる「田宮さんと同じような猪猟をしたい」と言ってくれる全国の猪猟人への答えとなり、少しでも元気に繋がれば大変嬉しいのであるが、なかなかそうもゆくまいと思っている。

（つづく）

射撃大会成績

一宮射撃場主催第４回あたらん会

射場　一宮射撃場（徳島県）

会期　平成22年７月11日

トラップ		①	②	③	④	HC	計
優勝	飯田　仁	23	16	21	22	2	84
2位	松本　稔彦	17	21	22	21	2	83
3位	齋藤　佳治	21	21	17	21	2	82
4位	守田　順一	20	21	17	21		79
5位	前田　實	22	17	17	20		76

スキート		①	②	③	④	HC	計
優勝	川口　治宏	23	21	24	22		90
2位	椎野　克行	22	21	20	23	3	89
3位	上田　量文	19	23	19	18	2	81
4位	上田　和夫	20	21	19	20		80
5位	湯浅　武彦	17	17	17	20		71

Ｊスキート		①	②	③	④	HC	計
優勝	天野　正美	18	23	22	24	2	89
2位	古市　茂久	20	20	22	24		86
3位	山花　正典	19	17	15	20	2	73
4位	朝日　輝昭	20	15	18	19		72
5位	中本　信哉	17	17	16	17	2	69